法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-10

〈エッセイ〉心残りの事々

KOCHI, Shosuke / 河内, 祥輔

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
79
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
7
(発行年 / Year)
2013-03-24

Hosei University Repository

心残りの事々

河内祥輔

古稀になってみると、古稀と還暦とは大違いであることがわかった。還暦の頃は、論文の作成に取り組んで新稿を四つも書き下ろし、それを拙著『日本中世の朝廷・幕府体制』（二〇〇七年）に収録して出版することができた。出来不出来は別にして、結構元気があったのだと思う。一方、古稀の今はすっかり様変わりした。論文が書けなくなったのである。書こうとしても、書くための根気や粘りがついてこない。これが老いというものなのであろう。このように古稀を実感している。

私は北海道大学を定年退職した後、法政大学に六年間在職をお許しいただいた。研究・教育の仕事に引き続いて従事できたことを、本当に有り難く思わずにいられない。この間、研究テーマとしたのは、承久の乱から鎌倉幕府の滅亡に至る時期の政治史である。その勉強を基に「日本史特講」（半期）の授業を毎年継続し、鎌倉時代史として一応の完結にこぎつけることができた。授業から受ける刺激と緊張ほど勉強に役立つものはない、とあらためて実感している。

しかしながら、古稀の私には、もはやこれらのノートを論文にする余力はない。心残りなことである。但し、その勉強が全くの無駄となったわけではない。この間たまたま一般向けの図書に、平安末・鎌倉時代史の概説を叙述する機会に恵まれた（『〔天皇の歴史4〕天皇と中世の武家』、講談社、二〇一一年）。もとより一般書としての性格上、史料解釈も論証過程も省き、論点も極力絞り、結論のみを書くしかなかったし、特に鎌倉時代後期の叙述はページ数のしわ寄せを受け、説明不十分な書き足りないものとなった。しかし、それにしても、埋もれてしまうはずであった卑見の数々が日の目を見たように感じられて、救われた思いになった。

Hosei University Repository

心残りといえば、それには二種類あろう。一つは答の見通しが既についている類で、それをまだ文章にしていないとか、不十分な形でしか書いていないという心残りである。いま述べた鎌倉時代の諸問題などはこれであり、さらに挙げればいろいろきりがないけれども、一応の見通しを得たということに満足すれば、諦めもつくであろう。

しかし、もう一つの心残りの方は簡単ではない。それは長年考え続けてきたにもかかわらず、どうにも答が見出せない、という類の問題である。ついに事件を迷宮入りにさせたまま定年退職する刑事にも似て、心が息まらないのである。

この類の心残りで最も気になっている問題を挙げると、それは、一三五一（観応二）年に足利尊氏・義詮父子がいわゆる南朝に降伏した事件である。後醍醐天皇が吉野で死去してから十年を経て、一三四〇年代の末には南朝方の退潮が明瞭になり、内乱は終結に向かおうとしていた。そのような時に幕府の内部分裂が発生し、それまで仲良く二人三脚でやってきた尊氏と直義の兄弟が対立するようになる（観応擾乱）。その抗争が深刻化するなか、尊氏・義詮は南朝に降伏した。尊氏は直義を鎌倉で殺すも、一方、京都は勢いづいた南朝方に占領され、北朝の光厳・光明・崇光三上皇が捕らえられて賀名生（南朝の皇居）に連行されるという結果を招いた。尊氏・義詮は降伏を破棄し、後光厳天皇を独断で擁立して、京都の朝廷と幕府を立て直すが、この混乱の傷は深く、以後、内乱は長期化することになった。

尊氏は苦境に立たされ、直義に勝つ自信を失ったのかもしれない。とはいえ、南朝に降伏するとは何事であろうか。南朝になぜ降伏してよいのか、尊氏の身になっていくら弁解しようとしても、私にはその理屈が考えつかないのである。

南朝に降伏するとは、南朝の天皇（後村上）を認め、南朝の年号（正平）を用い北朝の天皇（崇光）を退位させる、ということである。今まで尊氏は北朝の皇統を確立することに営々と勤しんできた。その努力が無に帰したと言ってよい。また、当然ながら敵方の南朝の天皇の権威は、一時的にせよ、一挙に高まった。一体全体、尊氏自身の立場はどうなるのか。自ら墓穴を掘った愚かな行為としか思われない。

このような彼の行動をみて、尊氏を状況主義者と呼ぶ説もある。義詮は一層の輪をかけた状況主義者で、尊氏は義詮に引っ張られたとの見方もある。義詮が主導的で、尊氏が義詮に引きずられたのはその通りであろう。しかし、尊氏が南朝への降伏を認めたのも事実である。彼もそれを宜しと判断したのは間違いない。

Hosei University Repository

それまでの尊氏は、天皇との関係において、決して状況主義者でも御都合主義者でもなかった。後醍醐天皇との関係にそれは明らかである。建武政府が内部抗争を抱えつつ、全国各地の反乱に対処しなければならなくなった頃、尊氏は、後醍醐の命を受けて反乱鎮圧の先頭に立とうとした。彼は後醍醐に謀反を起こしたと言われぬように、実に慎重に行動した。事実経過をみれば、手を差し伸べようとしなかったのは後醍醐の方である。

二人の決裂が決定的になり、尊氏が京都を追われて西に逃げた一三三六年二月、尊氏はついに後醍醐との連携を諦め、持明院統（後伏見・光厳）を担ぐ方向に転換する。『梅松論』（京大本）は持明院統との連携を勧める赤松円心の台詞として、

持明院殿ハ天子ノ正統

と記しているが、この「正統」〈しょうとう〉の言葉こそ、尊氏をはじめ、すべての武士が認める最も重要な天皇の価値そのものであった。持明院統が「正統」と認められたその瞬間に、後醍醐はもはや天皇としての価値をもたない存在となる。「正統」の価値観が共有されている限り、後醍醐と持明院統とは共存しえないのである。

尊氏は光厳上皇を「正統」として「治世」に担ぎ、京都を奪還するや、三六年八月に光明天皇（光厳の弟）を即位させた。そして、十月に後醍醐と和睦し、その男子を皇太子に立て、後醍醐を太上天皇として京都に迎えた。これは後醍醐に光明即位を認めさせた点において、尊氏の大きな政治的勝利であったといえよう。一方、後醍醐は自らの「正統」の地位は揺るがないかのように錯覚していたようである。しかし、すぐにその非を悟ったらしく、十二月に京都を脱出して吉野に逃れ、尊氏との抗争を再開するが、もはや頽勢は止めようもなかった。

尊氏の困難は、後醍醐との連携という最良の道が閉ざされたことにあった。しかし、彼は、光厳を後醍醐に替わる「正統」に盛り立ててその苦境を乗り越え、朝廷・幕府体制の再建という課題を着実に実現させた。ここまでの彼の行動は納得しやすい。そこから導かれる結論は、尊氏にとって、光厳を「正統」として護ることはかけがえのない原則であるに相違ない、ということである。

しかるに、一三五一年、彼はこのかけがえのない原則であるはずのものをあっさりと放棄したのである。光厳は蔑ろにされ、その「正統」の権威は貶められた。この南朝への降伏は、まことに異様であるというほかない。以上に辿った彼の

Hosei University Repository

行跡と対比させれば、この異様さは鮮明になろう。

問題は、尊氏にとって、天皇という存在のもつ意味に変化が起きたのかどうか、という点にある。どの天皇が「正統」であるかを見分け、その「正統」と信じた天皇を護ろうとするのが、平安時代以来の武士の精神であった。その精神は尊氏のものでもあった。それがついに変質し、衰弱する時代に入ったのであろうか。尊氏の精神もその変化の波にのみ込まれたのであろうか。私にはここのところの見極めがつかない。

かかる時代の変化というような見方で、簡単に事が済まされるとも思われない。なぜなら、尊氏の南朝への降伏それ自体は、全くの失策であったといわざるをえないからである。もしも彼がこのような過誤を犯さず、生涯にわたって「正統」光厳を護る姿勢を貫き通していたならば、室町幕府はもう少ししっかりしたものになっていたに違いない。これ以後の時代においても、「正統」を重んじる精神は、やはりそれなりに生き続けているとみるべきであろう。

しかし、一方では、この観応擾乱と呼ばれる事件を境にして、政治史上に大きな変化が生まれたという事実がある。観応擾乱は天皇が目立つ最後の事件となった。総じて、古代・中世の政治史上の事件のほとんどは天皇が中心である。事件は皇位継承や「正統」の問題が原因となって起きるのが通例であった。それがこの観応擾乱を最後にして、以後、政治史上の事件から天皇は退場してしまう。皇位継承問題が政治的動乱を引き起こすようなことはもはやみられなくなった。明らかに政治史の構造は変化し、天皇は現実に政治を動かすことのない存在になった。

このような現象をどのように捉えればよいのであろうか。尊氏の南朝への降伏という行動は、かかる政治史の変化と関連性を有しているのであろうか。尊氏のその行動によって政治史上の変化が引き起こされた、とみるべきなのであろうか。それにしても、なぜ尊氏は南朝に降伏したのか。疑問は循環し、堂々巡りをするばかりである。この問題は私の前に立ちはだかる壁である。この壁を崩せないのは、私の考え方、発想、方法に何か欠陥があるからではないのか。それは私のやってきたこと全体の欠陥に繋がっているのではないか。そのような不安が行き来する。

以上、無意味な駄文を綴るだけになった。この不始末を陳謝し、最後に、法政大学における新鮮で幸せな日々をお許しくだされた皆様に感謝申し上げる次第である。